水が育んだ織物

～「地図にない湖」から生まれた亀田縞～

高志中等教育学校
岩村　姫依

農業が産んだ織物

新潟市には、日本一長いとされる信濃川と日本屈指の大河とされる阿賀野川が流れている。その二本の川と小阿賀野川に囲まれた地域では、農業が盛んだった。その地域を亀田郷という。今から約三〇〇年前の亀田郷は「地図にない湖」と呼ばれるほどの大湿地帯であり、農業を行う際には腰や胸まで泥水に浸かりながら小舟を操らなければならなかった。しかし、稲作は春から秋にかけてしか行えず、冬になると生活を成り立たせるためには、何か別の仕事をしなくてはならなかった。そうした中で、一八六三年に冬場の副業として始まったのが、綿織物の生産である。そこで生産された織物は「亀田縞」と呼ばれ、その生産は次第に広がっていき、明治後期から大正時代にかけては、六〇〇を超える織物業者が生産を手がけるほどの全盛期を迎えた。





亀田駅におかれていた亀田縞を使用した花壇の写真

衰退からの復興

一度は全盛期を迎えた亀田縞だが、一九五二年頃、服装の洋装化などにより、織物業者の数は激減し、生産は一時途絶えてしまった。しかしその後の二〇〇四年、亀田縞を復活させるべく、有志によって復興プロジェクトが始まった。そのプロジェクトでは、亀田郷土資料館で所蔵されていた古布を徹底分析し、縦糸と横糸の密度や糸の太さ、染色法を学び、当時の頑丈な亀田縞を再現することができた。そして、二〇〇五年に、亀田縞を復活させることができた。現在では、立川織物と中営機業によって、亀田縞の知名度を上げるための若者向けの商品開発を行ったり、ブランド化のために地域団体商標登録証取得をしたりして、亀田縞の魅力をより多くの人に伝えている。



亀田繊維工業組合より

新潟市の魅力

現在、日本の市区町村では都市部への人口流出が問題となっている。もちろん新潟市も例外ではなく、新潟県庁の「にいがた県統計ボックス市町村別人口動態」によると、新潟県内では新潟市が最も人口の減少数が多く、その数は一七四人であった。特に、若年層の流出が増加していることがわかった。実際に私の周りの友人に聞いてみても、大学を機に県外へ行きたいと考えている人が少なくはなかった。私はその原因について新潟市には「これがあるから新潟に残りたい！」と思得る魅力的な要素が不足しているからではないかと考えた。そして、水に恵まれている亀田郷で生まれた亀田縞のように、その地域にしかない伝統工芸品が、若年層にとって新潟に残りたいと思う理由の一つになって欲しいと考えている。

まとめ

私は、小学校の頃授業の一環で亀田縞について少し学んだことがあった。そして、月日が経ち高校生になったいま改めて亀田縞について学んでみると、誕生から消滅、復興には様々な人の思いが介在していることに気付いた。そこで、新聞作成にあたって、亀田縞の頑丈さの秘密や製造工程だけではなく、人々がどのように亀田縞とか関わってきたのかという「背景」に重点をおいた。この新聞を読むときは是非そこに注目して読んで欲しい。